

2022年1月16日（日）／説教者：國分美生

説教：「祈るときには」

聖書：ルカによる福音書11：1～13

イエスが一人で祈っている姿を見て、弟子がイエスに「わたしたちにも祈りを教えてください」と頼みました。バプテスマのヨハネの共同体でも、ユダヤ教の各グループもそれぞれの「共同体の祈り」が祈られていました。イエスは「あなたがたが祈るときはこう言いなさい」と、祈りの言葉を教えられました。共同体の祈りとは、その共同体の経験を通して共同体の中から沸き起こってくる祈り、そして共同体メンバーたちを最も深いところで結びつける祈り、祈るたびに自分たちは何を大切に生き、行動しているかを確認する祈りでしょう。イエスの弟子たちは、彼らの共同体がイエスと共に生き、歩いていくことを意識していました。ですからイエスに「祈り」を願い求めたのでした。その祈りを、イエス・キリストを頭とする私たち教会もいつも祈ります。

「神よ、あなたの御名があがめられ、あなたの国が早く来ますように。私たちの心と体を支え、元気をつける、毎日の食べ物を与えてください。私たちも互いに許し合いますから、私たちの、あなたに対する罪をお許しください。私たちはあなたの御心を誤解し、罪を犯すような危険に常にさらされています。そのような誘惑からお守りください。」

食べ物は命に直結しています。命を失くしたら、主を証しすることも、宣べ伝えることもできません。また互いに許し合うことによって共同体は支えられるのだと、ルカ福音書は言います。神の御心を勝手に誤解し、自分こそ神の御心に忠実であると、頑固に思い込む誘惑が私たちの内にあります。そのように思い込む独裁者たちによって、多くの命が犠牲になり奪われてきた歴史を私たちは知っています。

この、イエスが教えられた祈りが、個人的なものではなく、支え合い助け合う共同体のものであることが、5節以下にある「夜中にパンを求める友の譬え」からもわかります。友のために、というその一点が、この人物があきらめず請い願う動機付けになっていることに私たちは気づきます。

ですから、「主の祈り」は私たち個人の祈りであるだけでなく、共同体で共に祈る祈りであるとイエスは言います。そして、心から求める、心から探す、心からたたく、それは行動・行いであると共に祈りであるのだと、私たちはここから教えられます。(國分美生)